

ある精神障がい者患者会に関する調査行為の終結に向けて

——序論としての補遺——

鎌 田 大 資*

Toward the Final Act of Research on a Self-Help Group of Mental Patients:
Appendix as Introduction

Daisuke KAMADA

論者は、1994年から2002年にかけて精神障がい者¹⁾の患者会での参与観察と解釈にかかわる理論的、実証的考察を書きすすめた（鎌田1994, 1995, 1997, 1998, 1998a, 1999, 2000, 2001, 2002）。2002年の「理由なき反発」では数年間の観察をまとめて扱い、調査に区切りをつけたものの、そこで考察は中断され、観察もいつとはなしに途絶した。残された論考全体は、あたかも結論を欠いた中間報告の連続に近く、完結に辿りつけず放りだされた仕事という読後感は否めない。

調査行為を再開する予定はないが、せめて現状のデータと解釈の蓄積を再考して、全体の再構成の手がかりとしたい。さらに、読者の理解の便をはかるべく研究経緯を簡単に概観する。

大学院生時代以来、論者は一貫してシンボリック・インタラクショニズム (symbolic interactionism. 以下、SIと略す) の学説、実証研究を実践してきた。諸事情からいつしかその行程は、SIに先行する初期シカゴ学派社会学の研究（鎌田2019など）に誘導された。また近年では、SIの立場から江戸時代以降のビジュアル公共圏の発展の歴史的考察に向かい、発禁処分とされたビジュアル表現のケース・スタディも蓄積してきた（鎌田2015, 2016, 2019a）。

論者は精神障がい者患者会の研究開始に当たって、特に日本での類似の研究例を意識せず、アメリカで刊行されたSI関連学術誌を参照していた²⁾。21世紀という新世紀を迎える数年間に手がけた精神障がい分野でのエスノグラフィ作品を、日本語で描かれた社会学のその他のエスノグラフィと並べて振りかえると、同時代のSI理論の展開を取りいれながら、エスノグラフィを構成した試みの類例はわずかである³⁾。社会学界の片隅に隠れるべく波風を立てないように、論文だけを所属機関の紀要に発表してきたおかげで、誰からの助言もない代わりに、こころない批判に仕事のペースを乱されることもなく、落ちついて研究知見を蓄積できた。そうした最善策を採ったものの、現実の社会過程に即して記述、分析するというスタイルを貫いたため、研究中は事態推移の方向すら予測できず、各時点

* 人間関係学部 人間関係学科

で力を尽くしていくばくかの論考を残しえただけである。

研究の過程で、論者はSIの理論的枠組から対象に応じて利用可能なものを選び、加工を施しつつ利用してきた。以下の考察では、過去にもちいた分析枠組を整理、カタログ化し、擬似的な理論枠組のようなものを提示する⁴⁾。そうした枠組のみを並べてそれらを選択した事情の一端を書きとめておくことも、論者がいなくなった世界で論考を手取る読者には有意義かもしれない。

1. どのようにして精神障がい者の社会復帰という研究対象と出会ったか： 自伝的断片

本節では、研究の前提状況として、論者自身の研究史を紹介する（Cf. 鎌田1990, 1991, 1994, 1995）。

論者が精神障がい分野の研究に志した契機は、京都大学大学院を休学して東京の映像（映画、テレビ）制作現場の仕事の参与観察に取りこんでいた時期のいくつかの出会いにある。特に、とある報道番組の取材スタッフとして、精神障がい者の社会復帰施設を訪問し、のちに患者の社会復帰に積極的に取り組む病院の見学に個人的にも訪れ、見聞を広げていった頃の経験が重要である。処遇の悪い病院に措置入院させられてしまった患者の他病院への転院や、地域の福祉資源への連携を模索しながらの権利擁護に関する聞き取り調査で、東京精神医療人権センター事務局担当者の説明を受け、精神医療改革における人権アプローチの重要性を知った。ただしそこで論者自身は、処遇の悪い精神病棟の患者を救援する司法面での支援者、運動家になるのではなく、「精神障がい者の社会復帰」という事業自体がどのように運営されているのかを、自分の居住している地域の実情に沿って観察、考察するという研究目標を設定した⁵⁾。

さらにこうした選択の背景として、それ以前、文学部で社会学を専攻し、SIにこころ惹かれるに至った経緯も略述する（Cf. 鎌田2019：82）。論者は高校生時代から学びたかった文化人類学と近似する分野として社会学を選んだが、ウェーバーやデュルケムのような、学説史上の古典的巨匠の作品には説得力を感じなかった。当時、大学院で指導を受けた宝月誠教授は、同窓の大学院生たちにもSI文献の検討を勧めており、助言にしたがってその研究を開始した⁶⁾。

またそれ以前の、学部3回生以降の社会調査実習で取りあげていた地元京都の社会問題についての研究が、古都税問題研究会という形で継続していた。論者が博士課程に進学したのちに、学士論文で考察した内容を会の仲間たちとともに深めて、1991年に「古都税紛争における京都仏教会のリーダーシップと理論化」というタイトルで、アンセルム・ストラウスの交渉パースペクティブをもちいて論文化した（Strauss 1978a）。

その直後、博士課程2年生の学年末に、ほかの人生上の問題にも促されて、芸術世界論のフィールドワークのため3年間休学して論者は東京に移住し、映画やテレビ業界の末端労働者として、ほとんど何もないツテやコネをたどって断続的に働くことになる。映画ではいわゆる独立製作スタジオの末端にもぐりこんで、いくつかの作品の撮影現場で働いたのち、あるテレビ局の元社員がフリーとなり起業した小さな製作会社に拾っていただき、またいくつかのジャンルの番組のスタッフになった。そのなかにケーブルテレビ用の報道

番組の取材AD (assistant director) の業務があった。1993年から4年にかけて、かつて55年体制といわれた自民党の一党支配体制が、一度、終わり、細川政権が短命で終了するあたりまでの時期だった。すでに亡くなった某新聞政治記者がキャスターを勤める番組で、自民党の族議員の仕事を紹介するコーナーを担当し、取材対象にしやすい福祉分野の一角である精神障がい者の社会復帰事業の現場に出かけた。しかし、半年ほどでその番組が終了し、所属事務所がレギュラーで手がける番組がなくなった。映像の仕事の切れ目にさしかかり、塾講師のアルバイトをしながら個人的に精神保健福祉周辺の勉強をはじめ、取材地近くの精神科を中心とした総合病院にも出向き、病院でやっているアパート退院と並行して、スタッフが患者さんを訪ねて病気や生活の様子を見て、相談を受ける訪問看護事業の啓発ビデオの製作を、自主映画の友人と一緒にボランティアで引きうけた。

ちょうどその仕上げる時期に3年間の休学期間が終了し論者は関西に引きあげ、今度は京都ではなく、大阪に住むことにした。

2. ミクロな内的社会過程の分析装置

復学後、当時はテレビ業界で取材慣れしていた関係もあり、論者は大学院生として居住地の北摂地域や、また東京で研修中の保健所スタッフと出会った大阪府南部地域の保健所、病院に出かけ、保健所での精神科デイケアにボランティアとして参加して、フィールドワークをはじめた⁷⁾。

この時期は、はじめたばかりのフィールドワークの分析にいきなり取りかかることもできず、理論的な地歩固めとして、ベッカーとストラウスを中心に開始したSIの研究を1世代若い人たちに拡充し、休学中も興味を感じて読んでいたノーマン・デンジンの著作を精読した。論者が主に接していた統合失調症系の患者とは、若干、事情が異なるが、*Alcoholic Self*をはじめとする3部作 (Denzin 1987, 1987a, 1989a) も手に取って「研究ノート」として紹介論文を出版した (鎌田1995)。また『エピファニーの社会学』(*Interpretive Interactionism*) (Denzin 1989=1992) でのエピファニー概念をもちいて、精神科ソーシャル・ワーカーにより執筆、出版されたある患者の社会復帰にまつわるライフ・ヒストリーを再解釈する1994年の「精神障害者の『社会復帰』——個人誌解釈の意義とワーカーの使命」を大学紀要に投稿した。この論文の執筆により、精神科医療の世界での人権回復、患者の権利擁護をテーマとする視座を定めた。ちなみに、この頃は、後述する精神科医療の社会史において1991年の国連勧告「精神疾患を有する者の保護およびメンタルヘルスケアの改善のための諸原則」がでた直後の時期であった。この勧告は宇都宮病院事件などの精神病院内でのリンチ殺人と見なされる傷害事件などを受けて、ある弁護士が、単身、ジュネーブの人権委員会の審議に乗りこみ、勝ちとったものと聞いた⁸⁾ (戸塚・広田1984)。当時は世界の人権状況からの外圧で、日本の精神科医療や福祉の分あつい壁が打ちやぶられ、全国での行政施策が立ちあがっていく時期だったので、自分の目で大きな変動を観察するよい機会かもしれないという期待もあった⁹⁾。

精神障がい者の社会復帰の運動と、精神医療人権センターの人権アプローチとは、一応、別個の動向である。ただし、もともと社会復帰運動に参加しない利潤追求型、人権制限的で薬漬け的な治療をおこなう一部の病院における患者の処遇改善をもとめる運動が人権ア

プローチである。そのため、精神障がい者の社会復帰運動と、患者の人権擁護運動は、平行し絡みあい相補的に存在してきた。またそこに身体、知的障がい者の小規模作業所運動というさらに別の系譜をもつ運動が結びつき、平成期の精神保健福祉的な社会復帰の運動が方向づけられた（共同作業所全国連絡会1987）。

復学して1年後、論者は現居住地で奉職し、研究を継続した。大阪で保健所の精神保健福祉相談員の役割の重要性¹⁰⁾を知ったので、現居住地でも病院ではなく行政の心の健康相談センターに問い合わせた¹¹⁾。幸運にもそこで病院外で展開している患者会運動にコミットしている職員に紹介され、参与観察することになるZ会について情報を提供していただいた。世話人としてこの会の運営を支援していたのも、ある保健所の精神福祉相談員だった。現居住地に来て以降、研究費を使って、東北、沖縄など、国内各地の精神保健業界の状況を観察して分かったが、各地での取りくみは、地域ごとに特徴あるまったく異なった形でなされ、しかも何をどう進めるかといった事業の内容や方針は、病院や保健所のソーシャル・ワーカーたちの個人的構想力や実行力により決まる。要するに、論者が見てきた状況自体が、ラルフ・ターナーによるSIの用語で言うと、専門職としてのソーシャル・ワーカーたち自身の役割形成(role-making)の過程に当たると思われる(Turner 1962)。確かに、平成の30年間は、各地の精神保健福祉関係者により独自の形で社会資源が立ちあげられ、精神障がい者に利用可能なサービスが蓄積されていく変動期、過渡期であった。

その時期の活動の特徴にも言及せねばならない。1991年の国連勧告以前から動きはじめていた社会復帰の考え方を前提に、運動が始動した関係で、精神疾患を持つ患者が回復の過程で、何らかの職について社会参加、社会復帰するという職業生活へのリハビリテーションがこの運動の最終目標となった。この目標は日本経済の高度成長期に立てられたが、バブル崩壊後、平成を通じて継続した不況のため軌道修正を強いられた。

そうした患者会のフィールドワークをはじめた頃に、デンジンについてもうひと踏んばり研究しておこうと、特に『感情理解について』(Denzin 1984)を精読した。そして、『アルコールの自己』(Denzin 1987)でのサルトルの自己欺瞞(mauvaise fois, bad faith)と、ベイトソンのダブル・バインド(double binds)という概念を精神科の問題に応用できるのではないかと考察を深めた。

デンジン自身は、この2つの概念を同じ意味のように並べてもちいることが多いが、強いて区別しながら解説する。

サルトルの自己欺瞞は日常生活において人が無自覚によく陥る危機的状況である。人間は社会のなかで複数の役割を獲得し、それぞれの要請にしたがって生きているものだと思うられるが、自己欺瞞はその2つ以上の役割が相互に矛盾し葛藤しあう場合に生じる。本人としては、自分の生活がうまくいっていると思っていても、視点を変えると危機的な状況に陥っていることがある。そうした状況にあっても、自分の危機を自覚しないでいることを指す¹²⁾。

自己欺瞞とよく似た概念に、グラウンディッド理論の研究者、キャシー・チャマズが慢性病研究で提示したアイデンティティ・ディレンマがある(Charmaz 1994)。たとえば、糖尿病を発症して食事制限が必要だが、それまでの男らしい生活を改められず、暴飲暴食を続けて失明する、足を切除するなど、症状が悪化する人の状況を指摘する概念である。ダブル・バインドは家族療法という形でカウンセリングに応用されているが、サルトルの自

己欺瞞も幅広くいろいろな生活状況に適用できるのではないかと考えられる。

論者は、自己欺瞞について自分自身の経験を分析するパーソナル・エスノグラフィという形でまとめたが、執筆当初はキャロリン・エリスらほとんど小説のような社会学の論文を書く著者たちの影響を受けた（鎌田1997; Ellis & Bochner 1996）。

一方、ベイトソンによるダブル・バインドは、ニューギニアとバリ島の民族学調査のあとで着想された。ニューギニアの偏執症を誘発する闘争的文化、バリ島での統合失調症を誘発しがちだが、巧みに子どもの気持ちをそらせて精神的窮地への耐性を養う親たちの子育て文化を説明し、ベイトソンがアメリカに戻ると統合失調症の発症過程の一端を説明する概念として整理された。ダブル・バインドは自己欺瞞と同様に生活に矛盾があるものの、そこから逃げてはならないという第3の要請が働き、実際には3重以上の禁止に縛られて身動きできなくなることを指す¹³⁾。

自己欺瞞とダブル・バインドは、こころの病気の発症メカニズムに社会学からアプローチする概念装置だが、実際に多数の患者にライフ・ヒストリー・インタビューをおこない、発病経緯をデータ化、検証することは、福祉、医療の世界での人権擁護の観点から調査倫理的に不可能だった。したがって、これらはあくまでも調査に向かう理論的解釈枠組みにとどまる¹⁴⁾（鎌田1998, 1998a）。

3. メゾ社会過程とミクロ・マクロ・リンク

ライフ・ヒストリー・インタビューは難しいが、各患者と友人として付きあううちに、自然とその人の発病経緯も含めた生活歴も教えてもらえるはずだとソーシャル・ワーカーに示唆され、保健所その他の患者たちの活動に論者も混ざっていく生活がはじまった¹⁵⁾。

そのようなフィールドワークを続けていたころ、大阪で文学的才能のある一人の患者から、自身で書いた手記のコピーをもらい、その内容の分析に、弁明、すなわちaccount概念、非行研究でもちいるマツァの中立化の技法論など（Matza [1964] 1990=1986; Scott & Lyman 1968）を使って、2000年の「こころの病と弁明する人生——経験の再解釈に見られる創造性について」という論文にまとめた。

その後、名古屋の患者会Z会の活動の変遷、人間関係、トラブルについて論じはじめるが、そのまえに、集団活動のなかで意思疎通がうまく働かない状況を考察する手がかりとして、1990年代から2000年代にかけて盛んに著作を発表していたトマス・シェフの考え方を参考にした（Scheff 1990, 1994）。

シェフは結婚カウンセリングの夫婦面接の録音、録画データを本人たちと一緒に見かえし、夫婦それぞれに、自分自身の表情の変化について解釈してもらうなどと分析法を工夫した。すなわち彼は、視聴覚データと当人の内面の感情の変化についての解釈を合わせて、問題のある夫婦関係の当事者が自分たちの問題自体への気づきを与える技法を編みだした。その結果、ごく短い会話データの断片を素材に、お互いに舌鋒鋭くののしりあう表面的なコミュニケーションと、真意を打ち明けることもできず、お互いの反応を予測しあって黙りこんでしまう気づまりが循環するうちに、関係性が悪化していく悪循環の構造を見いだした。この手法で第1次世界大戦開戦まえの外交文書も分析し、ミクロな会話場面の

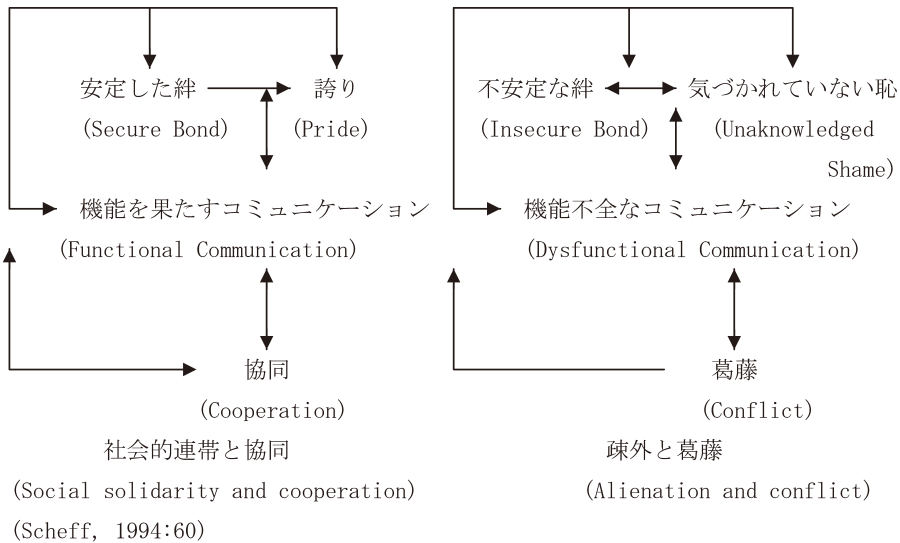


図1 シェフの図式その1

分析を手がかりにマクロな世界規模の不対立まで分析できることを示し、ミクロ-マクロ-リンクを論じた (図1)。

論者もこの考え方をもちい、患者会で発案された作業所見学会の感想会の座談会に関するやり取りを分析した。実際に見てきた作業所の状況とは無関係に、この座談会では、自分たちが通う作業所への不満を語った二人の参加者がいた。また会の世話人の保健所相談員の発案で、テープ起こしした内容を取捨選択のうえ編集し、患者が利用者の立場から作業所について情報を共有するといった趣旨で関係者に配布する計画が立てられていた。具体的には患者会の活動のニュースレターを作って病院のデイケアなどにおいてもらい、患者会への参加を勧誘する宣伝材料にしようという企画だった。ところが彼らの一人のクレームで、この計画が中止され、テープ起こした原稿も封印されることになった。論者はテープ起こした座談会データに関する考察を論文にまとめるつもりだったが、ニュースレターへの掲載が不可となると、論文化も諦めねばならず当時は困惑した。結局、問題視された箇所ははずして、見学した作業所を広いと感じるかどうかなどに関する座談会冒頭の、当たりさわりのないやり取りのみを活かして、1999年の「精神保健福祉サービスを受ける人たちの『沈黙の気づまり』」として論文化し、難をしのいだ。ただし、今から元データを見かえすと座談会での発言は微温的で遠まわしな不満の表出にすぎない。しかし実際に不満を外部に伝える段になり、誰かが作業所への不満を発言していることが分かれば、その発言者がすべての作業所に出入りできなくなるリスクがあるという判断から、座談会の内容すべての封印にいたった¹⁶⁾。シェフに依拠して、この封印の過程を、不満が渦巻いていても、まったく表明できない沈黙の気づまりと捉えた。これは面と向かって批判しにくい組織の上位者に対し、下位者が自分たちだけで悪口を言い合う「かげ口」という現象でもある。組織内の弱者側が感情のガス抜きをし、状況判断を共有するという意味もあるわけだが、大事な主張を上位者にも伝えられず、仲間内で話しあって我慢する姿勢を表す

ある精神障がい者患者会に関する調査行為の終結に向けて

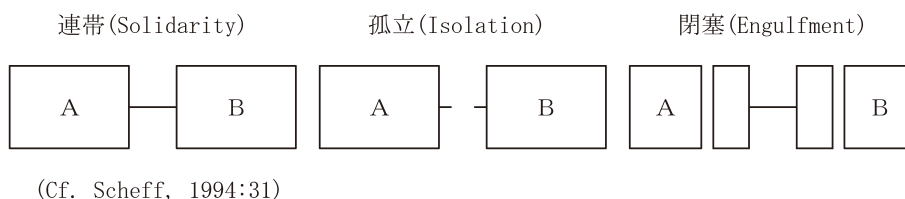


図2 シェフの図式その2

ものでもあり、結局は、よくない組織風土を温存させる元凶にもなっている（図2）。

こうした構図は、精神保健の世界の全体を雲のように覆っている。その後、2001年には「ある問題患者の生活と意見」として、ホフマンの『オス猫ムルの人生観』（Hoffmann, 1820-1822=[1958] 1989）のタイトルをもじった論文がある。これは先の座談会で自分の通う作業所の批判を語りまくった二人のうち一人を取りあげている。彼は今で言う引きこもり¹⁷⁾で、ある新興宗教の信者になり薬を飲まずに病気を治すという考え方だった。この人が、結局、Z会という患者会でも排除されて出入り禁止扱いされてしまう顛末を描いている。この過程については、デンジンの感情理解論から、他者と共通する経験が乏しすぎて、他者の感情理解がうまくできない人の陥ったコミュニケーション不全として分析した。患者やボランティアのあいだの集団的過程を描いてはいるものの、この論旨は、若干、その人自身の個人的性癖や資質に偏った分析になってしまったかもしれない。

さらに2002年の「理由なき反発」は、ニコラス・レイ監督、ジェームズ・ディーン主演の映画（1955）と、ロマン・ポランスキー監督、カトリーヌ・ドヌーヴ主演の映画（1965）を組み合わせたタイトルとした。ここでは、結果としてそれまでのフィールドワークの集大成のように、感受概念としてウィリアムとドロシーのトマス夫妻の状況の定義（Thomas & Thomas 1927: 571-575）と、メルヴィン・ポルナーの「世俗的理性（mundane reason）の自己保持」（Pollner 1987）という考え方をもちいて、論者の観察期間中に生じた患者会やその活動が変容していく過程を記述、分析、整理した。最初、指導的な立場で患者会の世話人をしてきた保健所相談員の、精神保健福祉の専門職としての考え方に反発して、特にかつての精神医療や福祉の状況にかかわりのない一般の主婦ボランティアが、一部の患者たちに同情し、日常知を中心とした視角から批判し（世俗的理性の自己保持）、独自の視角からそれまでの患者会活動を見なおし、自分で家賃や経費を負担して、患者の生活を応援する場所として新たな作業所や患者会を立ちあげた。

患者のための職親開拓や社会復帰を目指す精神保健福祉専門職の考え方を、先述の歴史的状況把握でもちいた言葉から、ここでは仮に社会復帰アプローチと名づける。それに対し、現在では、長びく不況の影響もあり、最終的に患者が就労することで社会復帰を果たす方針の現実味が薄れてきた結果、就労を最終目標とする考え方を後退させた生活支援アプローチが主流になっていると思われる。Z会ではそうした動向とは無縁に、中心となる患者の気がすむまで、後援者となった主婦ボランティアが向きあうということになる。たとえば、そのなかには、材料費も手間ひまもかかるビーズ細工の自主製品製作、すなわち手芸による自己実現を目指す時期もあった¹⁸⁾。その後、論者は会の活動を離れ、現在に至る具体的な動向は分からない。

日本社会全体の「状況の定義」としては、精神科の通院歴がある凶暴な犯罪者の行為がマスコミで強調され、恐怖感をあおってきた結果、おとなしく、弱気な患者も含めて、精神障がい者に恐怖と偏見の視線を向ける差別的な見方が蔓延している。そのなかで良心的な医師、看護師、ソーシャル・ワーカー、先駆的な社会復帰運動の試みに参加した患者たちやその縁者、家族たちが形作ってきた精神保健福祉専門職特有の社会復帰アプローチが存在し、それは生活支援と標語が変わっても、社会の片隅で大事に守られ継承されてきた。しかし、その考え方はやはり多少の業務経験や、現代の福祉状況に関する学習がなければ理解できず、身につかない。Z会の活動を変質させた主婦ボランティアはそれに反発した。すなわち、社会に向けて患者の人権をアピールするなどは時期尚早に過ぎる。自分の力の及ぶ限り、遊びたい患者の遊びには付きあい、自分が助けられる作業で自己実現を手伝うスタンスで、そうした志向とは無関係な患者は切り捨てて、自分が応援したい人だけを選んでかわりを持つ友愛クラブのような形を作った。こうした支援対象の選び方自体は、保健所や病院のような公共性の強い立場で患者とかかわる場合には難しく、サービスの平等性という原則にも外れている。また作業所、患者会の家賃を自分ひとりで負担するパトロンのなあり方も、生活に余裕があってこそ可能になる。したがって、この活動自体は医療や福祉の世界で働く原理の外側のものになっていった。とはいえ、メンバー選択の際のひいきや個人的な好み、公平性についての配慮を度外視すれば、就労を最終目標とせず、地域で生きがいを求めて楽しみになるような活動を続けていく方針を打ちだしている面で、現状の生活支援のスタンダードにはなっているかもしれない。

4. macro symbolic interactionism としての社会的世界論

こうした歴史的経緯をまとめるには、ストラウスの社会的世界論が適用できる¹⁹⁾。精神保健福祉の歴史を整理した図3を本文末尾に掲げた (pp. 48-49)。社会学説史では、学説を立てた当事者とその周辺でそれを学ぶ学生たちなどというように、学派や学閥という集団が自然にその周りに現れてくる (鎌田2019)。しかし、精神保健福祉の世界で生じた事件を社会史風にまとめた図は、社会集団や組織が主導した運動の変遷を描くものにはなっていない。精神医療の社会史は、あくまでも心の病気をめぐる日本一国単位の社会制度の変遷を、個別の重大事件とあわせてまとめたものに過ぎず、実際には、各時点でどの程度、患者が集団として組織されえたか、また患者に医療的、法的に対処する病院、保健所、警察、福祉事務所のような行政機関の顧客が、どの程度、自覚をもって自分たちの権利を主張しえたか、または変わっていく制度のなすがままに翻弄されたかなどの論点を整理し、各時点で患者やその家族の集団としてのあり方を考察する必要があるだろう。各社会資源の確立、維持に尽力した保健所相談員や作業所指導員、また各施設の利用者それぞれが形づくる社会的世界は、時宜に応じて、交差しては分化する有機体として考えられる。それらは制度の変遷、展開を貫いて生成、継続し、各関係者の人生上の契機、エピファニーによっても記述、分節されるだろう。

1990年代以降、国連勧告にはじまる平成の時代において、患者の人権や病院外の地域での生活を保障するための社会資源を充実させていく道程で、また旧来の社会復帰アプローチから生活支援アプローチへと、地域で暮らす患者に向けた各種サービスの方針が変

更されるなかでの、ひとつの患者会の変化を表すものとして論者の観察は位置づけられる。ちなみに最新の用語としては、2011年からは生活支援に代えて地域活動支援という言葉が当てられ、小規模作業所は、2012年から就労継続支援b型事業所と呼ばれるようになっている。

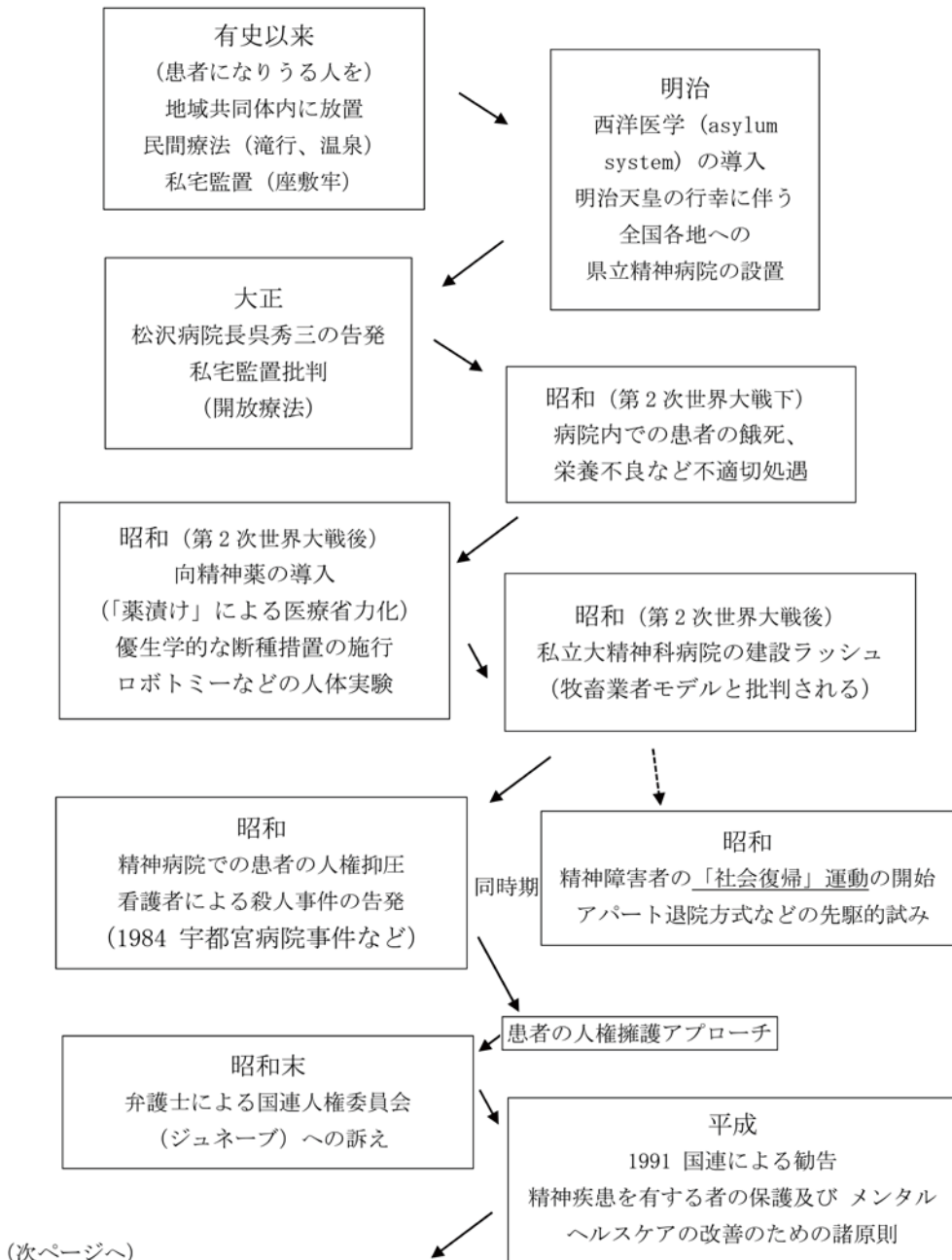
論者がフィールドワークしたような患者会活動が、精神科の病院やデイケア設備と離れて地域で開かれる事例は、比較的、稀なので、本論の記述内容が、そうした稀な活動に生じた活動や担い手の例外的な変化にすぎない可能性も考え、この研究知見の不自然な拡大解釈や一般化は避けるべきだろう。ただ、ケース・スタディを蓄積し、比較検討しながら何らかの洞察を得る方向で、一種のフォーマル・セオリーを形成していく第1歩が、このフィールドワークだと思っている。とはいえ、多くの文献で記録される東京、埼玉のみならず、論者が知る限り大阪、名古屋、静岡、沖縄などでもそれぞれ独自な形で、患者会活動は存在しており、調査が及ばなかっただけで、先進的な取り組みを目指す地域での多様な試みもあったかもしれない。ただし論者の人生の10年を費やした調査自体も山あり谷ありで、平坦に順調に歩いてこられた道のりでもなかったことから、これに類する社会調査がそう簡単に出現するとも思えない。とすると、調査データを占有している論者自身のがんばりにより、すでにあるデータを読みなおし、さらに検討する意義もあるかもしれない。

とりあえず論者が観察した平成30年間の変化は、1950年の精神衛生法制定による私立精神病院増設へ向かう目標の設定、1964年のライシャワー事件によって社会防衛的な大義名分を与えられて、1965年の精神衛生法改正²⁰⁾とともに生じた私立精神病院での病床数の急増、1990年ごろの国連勧告を受けた急速な社会復帰施策の全国化、公式化などに比べると、マイナーなものに過ぎない。しいていえば、論者のエスノグラフィ・データは、社会復帰から生活支援、就労継続支援へと精神科保健福祉の標語が変わっていった時代の1コマを記述するものかもしれない²¹⁾。この間、もちろんこころの病の人の人権、病の実態についての啓発活動は医療、福祉関係者を中心に地道に継続されたが、その一方で精神科通院者の凶暴性への偏見も折々の事件報道によって強化されつづけている。

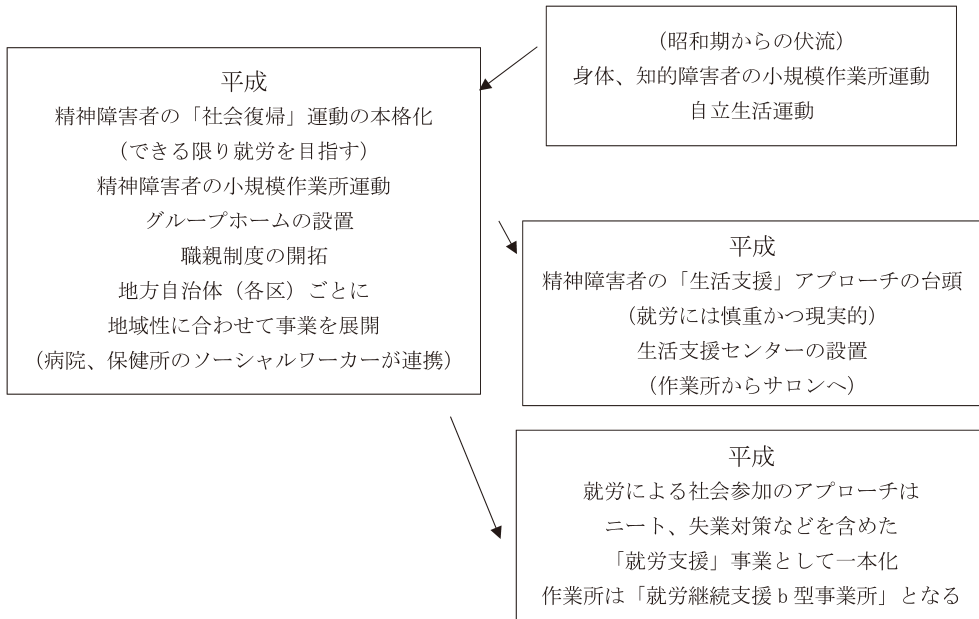
まとめ

1994年から2002年まで書きついだ精神保健福祉のフィールドワークにまつわるエスノグラフィについて、折々に依拠した理論の検討を通して、研究の進行過程の一端を記述した。この時期は1889年の国連勧告を受けた精神保健福祉事業の転換点に当たる。すなわち、各地の保健所の精神保健福祉相談員が地域の各種病院、福祉施設、職親事業所の関係者などと協力して築きあげてきた社会資源の展開、育成期であった。論者が観察した患者会の変質は、現在の目から見なおすと、社会復帰から生活支援へと精神保健福祉の標語が変遷していく状況や、不況下の失業対策としての就労継続事業などの拡充に伴う事業領域の統廃合時期とも重なり、それは時代の趨勢と必ずしもかけ離れているわけではないようである。

図3 人権アプローチの展開を中心に見た精神科医療の展開史²²⁾



ある精神障がい者患者会に関する調査行為の終結に向けて



注

- 1) 障害という字に含まれる「害」の字の語感が悪いというところから、あえて「碍」という当用漢字制定以前の正字、旧字を使うという社会的動向がある。本稿でも、行政的な白書に見られる「障がい」という妥協的な文字遣いを踏襲する(日本公衆衛生協会2017)。基本的に「害」の字の語感にまつわる悪印象は、本字である「碍」の略字「害」をその「当用」漢字に当てたところに由来する誤解であるが、今後、必ずしも社会的法律的に「障碍」という旧字表記が復活、定着するとは思えない。むしろ精神障害を「こころの病」などと言いかえるべきだろう。また制度、団体等の名称に「精神障害」が含まれる場合は、歴史的表記としてそのまま残す。
- 2) *Symbolic Interaction, Contemporary Journal of Ethnography, Studies in Symbolic Interaction, Sociological Quarterly, Qualitative Sociology, Qualitative Inquiry* など。ただし、論者が学術誌チェックをこまめにしていたのは、大学院在学中の1980年代後半から2006年までの期間に限られる。1991年から1994年までの休学期間の3年間も除く。
- 3) 昨今の質的研究は会話分析を利用したものが多く、秋谷・平本(2019)のような利用しやすい文献レビューも作成されている。ただし本研究自体は、人権上の配慮から録音、録画が制限され会話分析に適さない。
- 4) 本論の構想段階では、1999年の「精神保健福祉サービスを受ける人たちの『沈黙の気づまり』」論文で封印された座談会データの、サルトルによる再解釈を計画した。しかし準備のために過去の連作論文を読みかえしたところ、その作業は2002年の「理由なき反発」で済んでいると気づき計画変更した。本論はすべて既発表の文献に依拠した考察であり、スペースの制約からエスノグラフィの概要のみを提示し、データのディテールは示さない。その代わりに対象ごとに論者が感じる必要に応じて、いわば感受概念を導く作業用の理論として、ブリコラージュしてきた分析枠組を羅列する。擬似的理論枠組という言葉をもちいる理由は、一体化した理論的構築物構成の意図が論者にないたためである。SIでは社会体系という考え方をもちいないのと同

様、固定された理論体系で現実を裁断するような記述は採用しない。なお本稿では、調査対象者の実名を表記しないこととバランスを取るため、大学院時代の指導教員、宝月教授以外はすべて匿名とした。

- 5) 司法的社会運動家として活動を選ばないこの選択は、論者自身の法学的素養のなさからだけでなく、SI学習の日々のなか、意識するようになったフィールドワーカーとしての役割自認からなされたものだろう。論者が在籍中の大学院での社会学教育では、まずは理論を学び、徐々に調査に軸足を移していくべきだという考え方が強調されていた。
- 6) 具体的には、学部生時代にやりかけていた実験映画的な自主映画製作について考えてみたいと、宝月教授に相談したところ、ハワード・ベッカーの芸術世界論を紹介され、修士論文ではその文献研究をおこなった（Becker [1982] 2008=2016；鎌田 1990）。またベッカーの試みと平行してストラウスが概念化していた社会的世界論が、実は芸術世界論と同様の発想に基づくものと知り、それ以来、具体的な歴史過程への応用について構想を膨らませてきた（Strauss 1978, 1982, 1984）。
- 7) 基本的に北摂地区では飛びこみ電話でアポイントを取り、保健所の精神保健福祉相談員に調査協力をお願いし、近隣に居住する市民としてボランティアとしての患者のイベントへの参加を許された。大阪府南部では東京での出会ったスタッフを訪ねていくという形で、いくつかのイベントに参加、見学した。
- 8) 彼は、従軍慰安婦を sex slave と位置づけて、世界の人権に関する討議の場で大きな話題を提供し、日本軍の第2次世界大戦下における戦地での振る舞いに関しても、状況の見なおしを提言してきた。
- 9) その期待は、今から思うと、当初とは若干違う形でかなえられたのかもしれない。その変化自体が、論者が期待したよりも、人目に付きにくい社会の片隅でひそやかに進んだからである。後述の精神障がい者の社会復帰に関する社会史（本論第4節、図3）を参照。
精神医療における人権軽視の傾向は、1950年の精神衛生法施行後、精神科特例など医療・看護スタッフを他科よりも少なくしてよいという条件の下で、多くの患者を収容して長期入院させ、病院の規模が大きく患者が多いほど利潤が上がるという経営モデルを生みだした。その結果、私立精神病院を運営する特定の事業者に利益が集中し、彼らによる立法府へのロビイングもともなう利権の構図が生じ、内部からの改革が困難な鉄壁の体制が、国連勧告が出るまで放置された。これは世界的にも、またわが国の他の社会領域でもありがちな、利権構造に引きずられての人権軽視の失策、民主主義の根幹を揺るがす政治無策のスキャンダルのひとつであった。
- 10) 精神保健の事業展開にあたり、保健所が重要な役割を担ってきた理由は以下の通り。もともと結核予防運動における保健所の取りくみがよく知られており、それを応用するように精神保健の世界でも、保健所に疾病予防等の面での役割を期待された。やがて職親、グループホームなど病院外での生活の場の開拓をはじめ、病院外での地域の活動に熱心な相談員が各地で輩出した。ただし保健所の役割は近年の精神保健福祉業務の見直しのなかで、若干、縮小しているのかもしれない。白書『我が国の精神保健福祉』の平成29年版では、第2章「精神保健福祉行政のあらまし」の3「地域精神保健福祉」の（2）「地域精神保健福祉活動の主体」のイ「保健所の役割」という項目で、まずその役割規定がそれ以前と変わらずになされている。しかし、平成23年度版の第3章「精神障害者支援施策」2「社会復帰・福祉対策」IIIその他（2）「保健所における社会復帰促進事業」の項目は、次の平成27年版以降、削除された（日本公衆衛生協会2017: 69, 2011: 112-113, 2015）。この白書は制度変化に応じて不定期に発行された。
- 11) その際、勤務校の、永年、教育相談に尽力してきた同僚にセンターの管理職者をご紹介いただいた。

- 12) サルトルのテキスト (Sartre 1943: 85-111 = 1956: 151-203) から論者が抽出した自己欺瞞の構成要素については、鎌田 (1998: 51) を参照。
- 13) バイトソンによるダブル・バインド (Bateson 1972: 206-208 = 1991: 294-295) の必要要件については、鎌田 (1998: 51) を参照。
- 14) 患者の発病経緯などに関するライフ・ヒストリーの聞き取りを契機に、こころの病気が悪化することがあるとされ、保健所のソーシャル・ワーカーが状況を察知した時点でその試みは制止される。論者の場合は、保健所の相談員の紹介、許可を得て調査に出ていたので、「ライフ・ヒストリーの聞き取り」は、フィールドへの出入り禁止を招くタブーとなった。他研究者の統計調査においても発病経緯を含むライフ・ヒストリーについての設問は抑制されている (南山 2006: 218)。
また自己欺瞞やダブル・バインドなどの概念で捉えられる状況における自己概念の矛盾は、論者がマンガ研究で導入した「矛盾許容論理」で文学的、宗教的に解消されるかもしれない (鎌田 2017, 2018)。人生も社会も矛盾に満ちた取りとめない断片が集積した結果としてしか現れないのだから。
- 15) その際、ハリー・サリヴァンが「参加しながらの観察 (participant observation)」と表現したように、医療専門職ではなく患者と同等の看護助手のような立場で同性の患者にかかわっていくことで、病気の治療効果が得られるという考え方に言及する人が何人かいて、サリヴァンを含むシカゴの社会学者たちが交流しあった学説史上の環境の恩恵を、50年以上を経た段階で論者はこうむった (Havens [1976] 2013; 藤澤 2000)。社会学調査論の文脈で「参与観察」と訳される同じ用語が、精神医療の現場でも違う訳語により使われつつづけているのである。
- 16) 実際、座談会で激しく発言した二人は、過去にいくつかの作業所から出入り禁止にされており、この判断にもある程度の信憑性があった。
- 17) 論文では、フィールドで実際に聞いた言い回しを使用して、「閉じこもり」と表現している。
- 18) この過程は、古都税紛争の際の行政と京都仏教会の交渉過程およびその各局面における交渉文脈の分析と同様、交渉 (negotiation) パースペクティブでも整理できたかもしれないと現在では考えている (鎌田 1991)。
- 19) 社会的世界論の定義は以下の通り。「オペラ、バレエ、野球、サーフィン、芸術、切手収集、登山、カントリー・ミュージック、同性愛、政治、医療、法、産業、数学、科学、カトリシズムなどに関する社会的世界が、空間、対象、技術また技巧、イデオロギー、他の社会的世界と交錯、メンバーのリクルートなどを通じ、もとのものから分かれて下位世界に分化、ほかの社会的世界と合流し、新たな社会的世界として勢力を拡大する」(鎌田 2014: 35, 2019: 92, n.13; Strauss 1978: 121, 1982: 172, 1984: 124-125)。
「芸術世界」(Becker [1982] 2008 = 2016) も「社会的世界」も、組織のイデオロギーや行動様式、メンバーのリクルートのあり方など多様なきっかけから分派し、新たな下位世界 (subworlds) に分化し、またそれらが交差、合同、合流しあって社会的景観を形成し、時には社会のまったく異なる水準に属するものと思われえない世界同士が接続、派生しあう (鎌田 2019: 83)。
初期シカゴ学派の理論的モチーフの継承関係の図式化については別稿参照 (鎌田 2019: 86-90)。
- 20) この法改正により全国の保健所に精神衛生相談員が設置され、法律名の変更とともに精神保健相談員、精神保健福祉相談員と改称されていった (日本公衆衛生協会 2017: 25)。
- 21) この間には以下のような制度変化が観察される。1, 社会復帰から生活支援へと精神保健福祉事業の標語が変化した。2, 精神保健福祉士が国家資格化した。3, 精神障害者保健福祉手帳が交付され、福祉の支援において他障がいと足並みがそろった。4, 福祉施策の受け皿団体だっ

た全国精神障害者家族会連合会が厚労省職員の天下り人事なども含めた不祥事（本澤2002）の結果、2007年に破産、解散し、NPO法人全国精神保健福祉会連合会（略称・全福連、愛称・みんなねっと）と、NPO法人地域精神保健福祉機構が組織された。

牧畜業者モデルといわれた私立の大規模精神病院での長期入院患者の増大の時代に、何の公的な支援もないなかで、病院、保健所の各担当者が手弁当で築きあげた社会復帰アプローチが、いざ国連勧告を受けて公的に推進されるようになると、折からの不況により時代遅れになってしまった経緯は歴史の皮肉としかいいようがない。

22) 本図作成にあたり、各種白書（日本公衆衛生協会、2017など）、精神保健福祉、医療に関する一般書（戸塚・広田 1984 など）を参照した。

参考文献

- 秋谷直矩・平本毅, 2019, 「分野別研究動向（エスノメソドロギー）——エスノメソドロギー・会話分析研究の広がり」『社会学評論』70: 43-57.
- Bateson, Gregory, 1972, *Steps to the Ecology of Mind*, New York: Ballantine. (= 1991, 佐藤良明訳, 『精神の生態学』思索社.)
- Becker, Howard S., [1982] 2008, *Art Worlds*, 25th Anniversary ed., Berkeley: California University Press. (= 2016, 後藤将之訳, 『アート・ワールド』慶應義塾大学出版会.)
- Charmaz, Kathy, 1994, "Identity Dilemmas of Chronically Ill Men," *Sociological Quarterly*, 35: 269-288.
- Denzin, Norman K., 1984, *On Understanding Emotion*, San Francisco: Jossey-Base.
- 1987, *The Alcoholic Self*, Newbury Park, CA: Sage.
- 1987a, *The Recovering Alcoholic*. Newbury Park, CA: Sage.
- 1989, *Interpretive Interactionism*, Newbury Park, CA: Sage. (= 1992, 片桐雅隆他訳, 『エビファニーの社会学——解釈的相互作用論の核心』マグローヒル.)
- 1989a, *Treating Alcoholism: An Alcoholics Anonymous Approach*. Newbury Park, CA: Sage.
- Ellis, Carolyn and Arthur P. Bochner (Eds.), 1996, *Composing Ethnography: Alternative Forms of Qualitative Writing*. Walnut Creek, CA: Altamira.
- 藤澤三佳, 2000, 「医療と臨床社会学のパースペクティブ」大村英昭編, 『臨床社会学を学ぶ人のために』世界思想社, 47-70.
- Havens, Leston, [1976] 2013, *Participant Observation: Harry Stack Sullivan's Psychotherapy Methods in Action*, New York: Jason Aronson.
- Hoffmann, E. T. A. (Ernst Theodor Amadeus), 1820-1822, *Lebens-Ansichten des Katers Murr: nebst fragmentarischer Biographie des Kapellmeisters Johannes Kreisler in zufälligen Makulaturblättern*, 2 Bände, Berlin: Dümmler. (= [1958] 1989, 石丸静雄訳, 『牡猫ムルの人生観』上, 下, 角川書店.)
- 鎌田大資, 1990, 「H・S・ベッカーの芸術世界論——前衛はいかに約定へとすり変わるか」『ソシオロジ』35(2): 79-95.
- 1991, 「古都税紛争における京都仏教会のリーダーシップと理論化——ストラウスの交渉文脈概念からの整理」田中滋編『古都税問題研究——政治と宗教のプロブレマティーク』（科研報告書）, 33-55
- 1994, 「精神障害者の『社会復帰』——個人誌解釈の意義とワーカーの使命」『京都社会学年報』1: 97-113. (京都大学)
- 1995, 「否定的感情性について——N・K・デンジンによる人間の弱さの社会学の理解をめざして」『ソシオロジ』40(1): 127-142.

- 1997, 「自己欺瞞について——他者の感情性の誤解, その理論モデル, 厚い記述, 解釈」『椋山女学園大学研究論集』28 (社会科学篇): 103-113.
- 1998, 「自己欺瞞とダブル・バインド——論理階型論による概念の整理と事例解釈」『椋山女学園大学研究論集』29 (社会科学篇): 51-63.
- 1998a, 「DOING SOCIOLOGY——調査過程でのアブダクションとエピソード」『ソシオロジ』42(3): 143-148.
- 1999, 「精神保健福祉サービスを受ける人たちの『沈黙の気づまり』——ある座談会の封印をめぐる」『椋山女学園大学研究論集』30 (社会科学篇): 233-247.
- 2000, 「こころの病と弁明する人生——経験の再解釈に見られる創造性について」『椋山女学園大学研究論集』31 (社会科学篇): 21-38.
- 2001, 「ある問題患者の生活と意見——にせの感情理解について」『椋山女学園大学研究論集』32 (社会科学篇): 175-202.
- 2002, 「理由なき反発——精神障害者患者会活動における感情的葛藤と状況の定義」(前編)『椋山女学園大学研究論集』33 (社会科学篇): 189-210, (後編)『人間関係学研究』1: 241-65. (椋山女学園大学)
- 2014, 「市民社会をもたらし公共圏と社会的世界としての公共圏——社会学研究の礎石としてのハバーマスとシンボリック・インターラクショニズムの融合」『現代社会学部紀要』8 (1): 19-45. (中京大学)
- 2015, 「日本出版統制史再考——序説・江戸時代初期享保以前」『金城学院大学論集 (社会科学編)』, 12(1): 54-70.
- 2016, 「判じ絵, 迷走の果ての抵抗——絵師, 作者, 版元らの寛政改革への対処をめぐる」『現代社会学部紀要』10(1): 1-39. (中京大学)
- 2017, 「ギャグとストーリーのあいだ——マンガのジャンル分析に矛盾許容論理を導入する」第90回 日本社会学会大会 (於 東京大学本郷キャンパス, 11月5日) テーマセッション16 社会学とマンガ研究——個人と集団・組織.
- 2018, 「吾妻ひでおマンガの転調分析——矛盾許容論理とゴッフマンの *Frame Analysis* の比較とともに」第91回 日本社会学会 (甲南大学, 9月15日) テーマセッション1 マンガ研究・社会学の方法論比較.
- 2018a, 「メソディズムと労働組合運動の社会的世界論——アーネスト・バージェスの博士論文に学ぶ」『人間関係学研究』15: 11-25. (椋山女学園大学)
- 2019, 「20世紀社会学と社会調査の発生史——社会的世界論をもちいた初期シカゴ学派社会学研究要約と図解」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 50: 79-96.
- 2019a, 「『修紫田舎源氏』絶版処分再考——公共社会学の観点から」『人間関係学研究』17: 1-16. (椋山女学園大学)
- 共同作業所全国連絡会編, 1987, 『ひろがれ共同作業所——青年・成人期障害者のゆたかな未来を拓く』ぶどう社.
- Matza, David, [1964] 1990, *Delinquency and Drift*. New Brunswick, New Jersey: Transaction. (= 1986, 非行理論研究会訳, 『漂流する少年——現代の少年非行論』成文堂)
- 南山浩二, 2006, 『精神障害者家族の相互関係とストレス』ミネルヴァ書房.
- 本澤二郎, 2002, 『霞が関の犯罪——「お上社会」腐蝕の構造』リベルタ出版.
- 日本公衆衛生協会, 2011, 『我が国の精神保健福祉 (精神保健福祉ハンドブック) 平成23年度版』太陽美術.
- 2015, 『我が国の精神保健福祉 (精神保健福祉ハンドブック) 平成27年度版』太陽美術.
- 2017, 『我が国の精神保健福祉 (精神保健福祉ハンドブック) 平成29年度版』日本公衆衛生協会.

衛生協会.

- Pollner, Melvin, 1987, *Mundane Reason: Reality in Everyday and Sociological Discourse*, New York: Cambridge University Press.
- Sartre, Jean-Paul, 1943, *L'Être et le Néant*. Paris: Gallimard. (= 1956, 松浪信三郎訳, 『サルトル全集 18 存在と無—現象学的存在論の試み1』 人文書院.)
- Scheff, Thomas J., 1990, *Microsociology: Discourse, Emotion, and Social Structure*, Chicago: University of Chicago Press.
- 1994, *Bloody Revenge: Emotions, Nationalism, and War*. Boulder, Colorado: Westview Press.
- Scott, Marvin B. and Stanford M. Lyman, 1968, "Accounts," *American Sociological Review*, 33: 46–62.
- Strauss, Anselm L., 1978, "A Social World Perspective," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V.1, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 119–128.
- 1978a, *Negotiations: Varieties, Contexts, Processes, and Social Order*, San Francisco: Jossey-Bass.
- 1982, "Social Worlds and Legitimation Processes," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V.4, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 171–190.
- 1984, "Social Worlds and Their Segmentation Processes," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V.5, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 123–139.
- Thomas, William I. and Dorothy Swaine Thomas, 1928, *The Child in America: Behavior Problems and Programs*, New York: Alfred A. Knopf.
- 戸塚悦朗・広田伊蘇夫編, 1984, 『日本収容所列島——精神医療と人権1』 亜紀書房.
- Turner, Ralph H., 1962, "Role-Taking vs. Conformity," Arnold M. Rose, ed., [1962] 1998, *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, London: Rutledge, 20–40.